



なぜなら

あなたたちが

好きだから。

名前：ATHUKORALAGE

USHANI KAVINDINI

アトウコーララゲー ウシャーニ カヴ
インディニー

出身国：スリランカ

スリランカの大学・学部：

ケラニヤ大学・

人文学部現代言語学科

(日本語学科)

日本の大学・学部：

鹿児島大学・教育部学部

はじめに

私はスリランカのケラニヤ大学に在学している。スリランカで日本語の学位はケラニヤ大学とサバラガムワ大学でしか受けられない。

ケラニヤ大学では 1978 年に日本語の課外コースが開講され、1980 年には学位取得コースが開始された。2014 年の 3 月から日本語学科が開設され、私は現代言語学部日本語学科に入った。2015 年、日本語科全体では 3 学年 140 名ほどが日本語を学んでおり、その中で 15 人ぐらいが日本語専攻の学位をとるコースに入ることができる。



日本語専攻コースでは日本語で学習する科目として次の 10 科目がある。漢字、文法、読解、言語、論文基礎、異文化間コミュニケーション、ビジネス日本語、翻訳、教授法と文学である。観光学を学びたいという希望を持つ学生は観光学も受講できる。一般に卒業生は日本語教師になったり、日本企業に勤めたり、スリランカ企業(旅行会社、空港会社)に勤めたり、研究者、修士と博士のために日本に留学したりする。

私は子供の時から海外のことにとても興味を持ち、外国はどんなところだろうと思っていた。そして旅行に行ったりして海外の人たちと交流したいと思っていた。私が子供の頃、日本からスリランカに短期間来た日本人の学生に会った。母は教師として働いていたので、校長先生と教師たちと一緒にスリランカの古代の遺跡や古い町を見学に行った。目的地までずっと寝ていた彼女をぜひ楽しませてあげたいという気持ちを持ちながら、話そうと思ったら、言葉の壁のため、気持ちが伝えられず、つらかった。しかし、ボディランゲージを使って友達になった。彼女とのお別れでショックを受け、世界のどこに日本があるか初めて子供の目で、世界地図で調べた。日本に行きたいという気持ちを母に話し、どうやって行くの?と質問され、インドまで船で行き、歩いて韓国に行き、また海があるから、船で日本に着くと偉そうに言ったことは今も涙が出るほど懐かしく思い出す。日本語を専門にすると

思ったことと、日本に留学しようと思ったのは、あのころの私が心の中に残っていたからだろう。

大学に入学し、教科書でしか見られなかった日本を実際に味わってみたいという気持ちをもっと高まり、そのため日本語の授業をいくつか取り、日本語と日本と日本文化についての知識が増えた。2015年10月日本に留学できたことで、子供の時の夢がかなった。

鹿児島大学に留学が決まって、日本でやりたいことがもっと多くなった。日本の観光地を楽しんだり、日本人と一緒に交流をしたり、発展した日本から発展途上国であるスリランカがどんなことを学ぶべきかについて考えたりするのが日本に来る以前からしたかったこととしてあげられる。または日本の豊かな自然も体験してみたかった。地震、火山灰、冬のような意外な経験ができたことも一生忘れないと思う。“日本人はまじめで、積極的である”という言葉を私は何回も聞いたことがある。細かいことでも、ちゃんと気を付けて、頑張っている日本人の姿が好きだ。

日本の留学生活は私の人生を変えた。留学生として日本語の学習が始まって、勉強というものはストレスではなく、楽しめるものだとわかってきた。それだけではなく、人生をどうやって楽しんでいけるかについてもわかった。母国で勉強に打ち込んでいて、ストレスがたまっていた私は、日本に留学して勉強と娯楽のバランスをとる方法を身につけた。

もともと本が嫌いな私が変わった。今では本を見るだけで読みたくなる私が、日本で一番時間を過ごしたいところは本屋さんだ。本の種類が多く、簡単に読める本も多く、日本語の上達にも役に立つ一方、本の中の世界に入り込んで人生を楽しめる。一年間の留学ができて、よかったと思う。

帰国してから、また大学の日本語専攻コースを目指して頑張りたい。自分自身が日本で得たいろいろな知識を増やしていきたい。

将来は日本とスリランカ、両国の関係をもっと強くするためにできることがあれば、ぜひ頑張りたい。両国のため何かやらなければならないという気持ちが強いので、将来はその夢がかなうような仕事にぜひつきたいと思っている。

洋上アルプスからのメッセージ

日本に来て初めて旅行したところとして屋久島はまだ印象に残っている。屋久島の豊かな自然が私の気分をさわやかにしてくれた。行く前に屋久島のことを学び、屋久島に行きたいという気持ちがだんだん高まってきた。しかし、鹿児島から屋久島まで船旅で行くと聞き、不安な気持ちが心の中になかったとは言えない。幼い頃から船旅を怖がっていた私だが先生と友達と一緒にだったため、安心感があった。ずっと待っていた、屋久島に行く日の早朝は大雨だったが、船旅がどんなに怖くても屋久島に行きたい気持ちが強かった。

早朝鹿児島港で屋久島までの船に乗り、2時間半ぐらいの荒波の中の船旅を楽しんだ。屋久島に行く途中、ロケットを打ち上げる種子島に寄り、やっと目的地に着いた。

1993年に世界遺産として認定された屋久島の93%は山で人が住んでいる場所は3%に過ぎない。屋久島での初めての一日は寒かったが、登山することに決まった。そして山の中に入ると、感動的な屋久島の大自然があった。

この写真二つだけでは屋久島の自然を表現しにくいけど、こんな感じだ。



鹿児島県熊毛郡屋久島町(屋久島)に自生する最大級の屋久杉と言われる縄文杉を見たかったのだが、そこまで歩いて8時間かかるためにあきらめた。送迎バスにあった写真で“縄文杉ってこんな感じか”と思った。4,000年以上生きていると思われる縄文杉がおじいさんの格好で可愛かった。

さらに屋久島で一つの珍しいものが目に入った。それは、ヘリコプターで運ぶ屋久杉である。ガイドさんによると、一年に一週間か二週間しかやっていない、珍しいことであり、何回も見られたのは素晴らしかったと思う。

以下の写真はそのとき撮った写真である。



屋久杉は油脂が多い木であり、そのため長生きする木である。その木を利用して、様々な工芸品を作る。とても貴重な木であり、いろいろな目的のため、その木を同じぐらいの大きさに切ってヘリコプターで運ぶらしい。珍しいことであっても、危険なことに違いない。3年か4年ぐらい前に屋久杉を運んでいたヘリコプターの事故で人もなくなっただけで、才能もバランスも必要な作業である。

山の中の大自然と空気を心から楽しみながら、山の外に出たら、道の真ん中を偉そうに歩いている動物が一匹。短くて、触りたくなる白い尻尾が現れてきた。

屋久島の代表的なヤクシカだった。人懐こいヤクシカで、人と写真を撮ることも大好きな動物であった。人に慣れているヤクシカは写真を撮る時ちゃんと見ていて、いいポーズで写真に入る。私が写真を撮ろうとしたら、鼻をカメラの方に向けた。きれいな顔を撮りたかったのに、わざわざ鼻を見せていたので、鼻の写真を撮った。今も屋久島の写真に目を通すとき、私の目が止まる写真である。



屋久島について話すと屋久島の季節のことも思い出す。屋久島は日本で一番寒い北海道の気温に似ているところもある。亜熱帯の植物に恵まれているところもあり、多様な季節を体験できる素晴らしい島である。

屋久島で過ごした三日間は短いですが、いろいろ懐かしい思い出が今も頭に浮かぶ。その中の一つは中央中学校の学生たちのことである。中学校で以前から準備していた自国の発表をしなければならなかった。どうやってしたらいいだろうといつも悩んでいた。私は一般的にみんなが知っている国々の中になかなか入らないスリランカから来たからだ。これは日本に来てから私が一番悩んだこととも言えるだろう。昔から現在に至るまでスリランカと日本の関係が悪かったとは言えない。「出身はどこ？」と聞かれスリランカと答えると、まず、その発音をわかってもらえない。また位置ももちろん説明しなければならない。大人がそうだったら中学生のための発表は最も困るだろうと思っていた。しかし、スリランカのことを

知っている人が一人か二人いるかもしれないと心のどこかで私に声をかけ、安心をさせていた。なぜなら、スリランカと言ったら「紅茶」「宝石の国だね」「昔セイロンだったね」と答えてくれた人たちも意外といたからだ。発表が始まり、中学生のグループは自分が好きな発表を聞きに行く予定だった。誰も私の発表のところに來てくれないかと思ったら、中学生のグループが三つ、同時に私の方に走ってくる。一つのグループしかいられないので、はじめにきたグループを残すようにした。子供たちが私の国の話を聞きたいという気持ちが私の心に伝わってきた。その気持ちだけでもよかった。発表が始まってから中学生に合うように私もいろいろなクイズを使い、簡単で面白い点を述べ、グループと楽しい会話を続けた。クイズで勝った一人にスリランカから持ってきた小さいプレゼントをあげるようにしていたためみんなも元気な顔で頑張っていた。

「ウシャーニさんへ、

今回の交流ではたくさんの思い出ができました。

特に印象に残ったのはクイズです。

ウシャーニさんと協力して考えたクイズは楽しく、何回もしたいと思いました。

本当にありがとうございました」

洋上アルプスからのメッセージだ。私のことを思い出した中学生の一人が、書いてくれたのだった。活発で、外国人と話すのが好きな子供たちが留学生の私たちを大歓迎してくれたのを、今も嬉しく思い出す。外国について興味を持っていた子供たちと一緒に交流ができてよかったと思う。しかし、私たちの人生の中で初めて会ったともいえれば、最後の出会いともいえるのだろう。そう思うと心の中は苦しいが、心のどこかで再会を待っている。

屋久島で過ごした三日間は屋久島に住んでいるやさしい人たちのおかげで一生忘れない思い出になった。わざわざ私たちのために屋久島のおいしい料理を作ってくれたり、きれいなところに連れていってくれたり、いつも横にいて私たちのために頑張ってくれた。

屋久島は大自然でみんなの心をつかんだところだ。意外と鹿児島に住んでいても人々があまり行こうとしないところである。これは私の性格を思い出す。豊かな大自然が見られるスリランカにいたとき私もいろいろな観光地へ行こうとしなかった。しかし自分の近くにあるものを大切にすべきだと私に考えさせたのは屋久島である。自分の国の大切なところでも、地域の観光地でも、価値があるところであれば、「行かなかった」「まだだ」とは言えないだろう。

今このレポートを書いている日から留学が終わる日まであと3か月しかない。しかし、もう一度屋久島に行く日を心から待っている。

桜の間から現れた桜島

日本に来て、特に南鹿児島に留学した初めの頃、私は鹿児島の生活が好きではなかったというより怖かったといえる。なぜかと言うと目の前に桜島があるからだ。実は親たちも心配していなかったとは言えない。どうしてそこまで心配していたのだろう。もちろん火山がない、地震も起こらないスリランカから私が来たためだ。鹿児島に留学する一か月間前に鹿児島についてグーグルで調べたとき、私の初めての印象は桜島だった。グーグルの写真を見て一番に出たのは火山で、二番目は、ヤシの木がたっている写真だった。え・・・!?スペルが間違っていたため、鹿児島の写真がでなかったと思って、字を間違えないように鹿児島市と書いてみた。結果は同じだった。「日本全体には火山がいくつもある。まさか鹿児島にも・・・」と思ったらその通りだった。

鹿児島に来てからどこに行っても桜島がよく見える。いやだなと思い、その方を見ようとしなかった。しかしある日、留学生と一緒に桜島を見学に行った。なぜ行ったかと言うと、留学生のみんなが桜島を見学に行っていて、いろいろな面白い話をしたり、きれいな写真を見せてくれたりしたからである。この写真は桜島へ行くフェリーから撮った写真だ。早朝だったので、桜島が雲と重なっていて、まるで噴火しているようだった。



船で桜島に到着する予定だった。友達と一緒に楽しく船旅の時間を過ごし、順調に桜島に着いた。フェリーで行ったのは初めての経験で、目の前に表れた桜島にフェリーが少しずつ近づくと心のどこかがうれしくなっていた。なぜだかわからない。



桜島をバスでまわり始め、初めて桜島の自然に感動した。桜島の噴火や火山灰など困ることもあるが、天然の温泉や世界で最も大きいと認定されている大根などいいものもたくさんある。桜島に行けば、毎日の忙しい生活で疲れた人生の気分もさっぱりするだろう。



みんなと一緒に桜島の周りを走るバスに乗ったが、歩きながら桜島を感じたいと思い、私たちは次のバス停でバスを降りた。どこで降りたかも分からない。桜島で迷ってもいい経験になるんじゃないかと思って、じゃんけんで道を決めながら前方に歩くと、木材で作られたものがあらわれてきた。ひとつの家族が笑いながら話していた。母、

父、息子さんだった。三人が見えても三人の足が見えない。「桜島で足がない宇宙人を発見！」と新聞に載ることをみんなの想像の世界でイメージした。近づくとお湯の湯気が見えてきた。お湯の展望台だった。「よし!早く靴を脱ごう！」とみんなで靴を脱いで、足湯に入り、気分転換した。世界の東西南北の話が始まった。

世界のいろいろなところから来た私たち留学生と一緒に足湯に入ったのは今でも印象に残っている。今一緒にいて、お互いに助け合い、一緒に楽しむ私たちがいつか離れるかもしれない。いつか年を取ったら、また桜島に来てこんな写真を撮りたい気持ちは強く心の中に残っているが、もうこんな写真は撮れないのだろう。我々の運命に頼むしかない。

私はその日からいつも桜島の写真を撮るようになった。季節によって桜島がもちろん違う。季節ももちろんだが、朝、昼、梅雨の時の桜島がどのように見えるか私は写真を撮るようになっている。



撮った写真の中でこの写真はいつも私の気分をさわやかにしてくれる。この写真は春の日の朝5時ごろに撮った写真である。日が昇って明るくなっていく桜島の美しさは、本当は行って感じたいが、残念ながら会館から撮った写真である。

春に見る桜島が最も美しいといえるだろう。桜が咲く桜島は桜の向こうに美しく見える。春の日の夜を桜島で過ごせたら、どんなに楽しいだろう。桜の間から見える写真はカメラではこのように残っていた。桜の桜島だった。



夏になると火山灰が降ったりして、大変なところもあるが、それに負けないように鹿児島に住んでいる人たちは頑張っている。掃除が大変だったり、洗濯物がほしにくくなるが、逆に農業や温泉など人々の暮らしに役に立つ。疲れた人々の気持ちをさわやかにするところはもっと感動的だ。

まとめ

私にとって留学は大切な意味を持つ。全然知らない人たちの中で生きていくことを教えてくれた。言語、文化だけではなく考え方までも自分と全く違う人たちと一緒に過ごさせるからだ。留学生活は厳しいものだから、自分の人生が全く変わる。母のように、子供を厳しく育てているうちに、子供たちがだんだん成長していったら、社会に入るのを見て嬉しくなるのと同じだ。

もうそろそろ留学期間が終わる。私はそのため精神的な準備をしている。それはどの留学生もしなければならないことだと思う。全然知らない社会で生きていくのはどんな人でも勇気を持って頑張らなければならない。一年の間にだんだん社会に慣れてきたら、また前の社会に入らなければならない。私たちは浦島太郎のように感じるかもしれない。簡単な言葉でこのことが言えても、深い意味がある。

日本での留学生活はいつも私たち留学生に親切にしてくれた日本人のおかげで頑張ることができた。私が日本に来てから困ったことがたくさんある。大したことではないが、小さいことなのにどうしたらいいだろうと思って迷ったことがたくさんある。必ず笑顔で、手伝うために私の横に立っていた日本人がたくさんいる。全然知らない人たちだ。

日本人は自分たちで英語ができないと言っている。外国人と英語の交流もできるだけ避けるようにする。でも誰か留学生が困っていたら、英語があまりできないと言って、そこから逃げることは全然しない。ボディランゲージとか何かを使っていつも助けてくれる。道がわからなくなっていたら、行きたいところまで連れていく人が日本人の中たくさんいる。世界では英語を一般的に使っているが、困っている人に対して言葉で表わす案内より、自分の行動が大切なのではないだろうか。そのときのあなたたちの行動が大好きだ。

ある時、私も困っていたことを思い出す。その日、私がいたのは目黒というところだった。次の日は海外旅行のため成田空港に行かなければならなかった。目黒駅から東京駅まで行った私は東京駅で成田空港行きのリムジンバスに乗る予定だった。東京駅は初めてで、あんなに大きい駅は初めてだった。東京駅の中のいろいろなところの看板を見ながら歩いた私が、ある場所でどこに行ったらいいだろうと迷っていた。荷物も重くて、時間もなくて慌てていた私が困っているのを見て、ある日本人が来て英語で話してくれた。日本ではこんな日本人がたくさんいる。世界もこのように変わっていったら幸せで、素晴らしいところになるに違いない。彼は背が高く、フォーマルなスーツを着たおじいさんだった。奥さんと一緒だった。英語もペラペラで、やさしい心を持った人だった。彼も急いでいたに違いない。しかし、困っている私を無視しなかった。私が行きたいところを聞き、私を案内しながら前方を向いた。私も彼らの後ろを歩いていても、心配は心の中に続いていた。なぜかといえば、私はよく知らない人を信じるのは怖いからだ。困った顔をずっとしていた私の横にいた彼の奥さんがやさしい笑顔をみせてくれた。たぶん私の顔から困っていることがわかったのか

もしれない。その二人のおかげで飛行機には遅れなかったが、私の心のどこかで悔しさが残っている。あの日、私は「本当にありがとうございました」しか言えなかった。感謝の気持ちが心の中にあってもはっきり伝えられないことは何よりも残念なことだ。しかし、心から感謝している。相手のことをいつも大切にすることは私が最も感動した日本人の性格である。

1年間の期間は短くても、できるだけ日本の生活に挑戦して、自分が想像していた日本と実際の日本のものを対比して受け入れることが重要だった。日本に来てから日本の生活がもっと好きになった。5年間ぐらい前に「日本語を勉強する」と決心した私は、今もそうしてよかったと思う。日本語を勉強するのはこれで終わりではなく、卒業後も勉強を続けたい。これからも知らない日本人の中で、仲間を作っていくことを楽しみにしている。

なぜなら、あなたたちが好きからだ。

〈添付：屋久島異文化交流セミナーでの発表資料〉

